2016年７月20日

八街キリスト教会

**「ハガイ：神殿再建の預言者」**

聖書箇所：ハガイ書　2:1-9、2:20-23

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　12章預言書のなかでもハガイ書は他の預言書と異なっています。神殿再建を激励するものであり、そのなかで預言者ハガイが神様より預かった言葉をユダの民に告げる内容です。それは神殿再興を通してユダ民族を神様が救われる、という約束を示しています。

　まず時代背景について簡単に述べます。歴史叙述はエズラ書に載っています。ユダ王国はBC587年に新バビロニア帝国のネブカドネザルによって滅ぼされましたが、この前後3回にわたってユダ王国の上流階級の人々はその首都バビロンにつれて行かれました。バビロン捕囚と言います。新バビロニアは短命な王朝でおわり、ペルシャによって征服されました。その時のペルシャ王キュロスは宗教的寛容政策を採用し、バビロニアのユダヤ人が故郷のエルサレムに帰還するのを許しました。BC539のことです。帰還のユダヤ人は神殿再建をしよう、と考えますが、当時カナンの地に住んでいた人々、中でもサマリヤ人の抵抗に遭い神殿再建は中断せざるを得ませんでした。サマリヤ人というのは北王国がアッシリアによって滅ぼされたのち、シリア、メソポタミアからサマリア近郊に移住してきた人々がその地に残っていたヤハヴェ信仰を守っていた人と混血して生まれた人々の事です。ヤハヴェ信仰とは言ってもバビロニアから帰還したユダヤ人からすると純粋なヤハヴェ信仰ではない、ということから彼らの神殿再興協力の申し出を断ったのです。そのため、サマリア人はペルシャ本国に讒訴し神殿再興を妨害したのです。しかし、最終的にペルシャの宗教的寛容政策がサマリア人の妨害を排除し神殿再興を許可するに至ったのです。それがBC520年、ハガイ書1:1でいうダリヨス王の第二年です。そして呻吟八苦の苦難の末何とか第二神殿が完成したのがBC515年です。5-6年かかっています。ちなみに、ハガイ書の時代はこの後の文書であるゼカリヤ書の時代と重なっていると考えられます。マラキ書は更にその後の文書です。

　ハガイ書は2章しかありませんがこの中には4つのメッセージが含まれています。第一のメッセージは第1章全体です。第二のメッセージは2:1-9です。第三のメッセージは2:10-19です。第四のメッセージが2:20から最後までです。お読みいただいたのは第二と第四のメッセージです。

　第一のメッセージは「神殿再建へのよびかけ」です。さっとハガイ書を読んで気になる言葉は「主の御告げ」とか「万軍の主はこう仰せられる」という「主の言葉があった」と言う表現が多数登場することです。わずか2章、38節のなかに「主の言葉があった」が4回、「主は仰せられる」とか「万軍の主は--仰せられる」が7回、「主の御告げ」とか「「万軍の主の御告げ」というのが10回出てきます。この言葉は「神の言葉」を預かった預言者が民に告知する時、権威をもって語る時に使用する言葉です。おそらく、神殿再興をするのに抵抗が大きく、民衆は諦め気味になっていたのだと想像されます。2節に「この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている」とあります。なにか実行するのが嫌な時の言い訳の言葉です。このような状況に於いては、厳粛な神の命として神殿再興を語らねばならなかったのだと思われます。このような表現は他の預言書にも出てきますが、これだけ頻繁に使用されるのは異常です。事態の重大さを示しています。もちろんここで神殿とは所謂第二神殿という物理的神殿を指していますが、私たちがこれを読む時は信仰の次元で考え、神殿とは教会の事とかもっと内面的に心の中の祈りの場のことと考えても良いと思います。祈りの場には神の言葉即ち聖書の御言葉が蓄えられている必要があります。それを蓄え、いつでも引き出せるようにしている宮が神殿です。

　5節と7節に「あなたがたの現状をよく考えよ」という言葉がでてきます。いろんな訳があります。新改訳は「現状を良く考えよ」ですが口語訳は「自分のなすべきことを良く考えよ」です。新共同訳は「自分の歩む道に心を留めよ」でありフランシスコ会訳は「どう過ごしてきたかをよく心に留めよ」です。やはりカソリックの神父であるバルバロ訳がちょっと異なっており「自分のやったことを思い直せ」です。直訳しますと「あなた方の心をあなたがたの道の上に据えよ」です。この表現の直後をみてみましょう。6節には「あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ」とあります。これは努力をしても報われない、即ち神の祝福がない状態を表しています。どうして努力しても神が報いてくれない状態をなぜだか考えて見よ、といわれているのです。また8節にはもっと直截に「山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現そう。主は仰せられる」とあります。自分たちが何をしてきたか、何をしようとしているかを良く考えよ。まことの礼拝をしてきていないではないか。神殿を再興し、まことの祈りをささげればそこに主の栄光が現れあなた達は祝福される、と言われているのです。要するに、「現状をよく考えよ」と新改訳で訳されているのは自分たちの信仰の姿勢を良く反省しなさい、と言っているのです。義務だからということで形式的にお祈りをしているのではなく「霊とまこと」をもって祈りなさい、ということです。9-11節では民は多くの恵みを期待したが神様はこれに報いず逆に「ひでり」を齎したと言われています。この現状をみて悟れ、と言っているのです。自分のためになる家を豊かにしようとはしているが神の宮は廃虚のままである。主の言葉によってこれを再建することがまず第一になされなければならない、と言っているのです。アモス書8:11にあるように「主の言葉のききん」の現状にあることを悟れ、ということです。

　2:1-9節は第二のメッセージです。神殿再興を鼓舞するメッセージです。2節に「民の残りの者」と言う表現があります。1:12に既にでています。「残りの者」とは捕囚されずにユダの地に残った者で信仰深い者ということです。「民の残りの者」ですから要するに敬虔な民衆です。3節では「以前に栄光に輝くこの宮」というのがでてきます。ソロモンが建築した第一神殿のことです。それと比較すると第二神殿は「あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか」と言われています。そして4節、5節で主による激励、鼓舞の言葉があります。お読みします。「しかし、ゼルバベルよ、今、強くあれ。－－主の御告げ－－エホツァダクの子、大祭司ヨシュアよ。強くあれ。この国のすべての民よ。強くあれ。－－主の御告げ－－仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。－－万軍の主の御告げ－－/あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。恐れるな」。強くあれ、が3度でてきて、最後は「恐れるな」です。そして「主の御告げ」でその命令が峻厳なものとされています。これはヘブル語で「ha:zaq」「強い」という動詞の命令形です。この言葉を聞くとおそらくヨシュアがカナンの地に入る時に主がヨシュアを勇気づけた言葉を思い出すでしょう。ヨシュア記1:6をお読みします。「強くあれ。雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならないからだ」。1:9をお読みします。「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである」。10:25をお読みします。「ヨシュアは彼らに言った。「恐れてはならない。おののいてはならない。強くあれ。雄々しくあれ。あなたがたの戦うすべての敵は、主がこのようにされる」。これはヨシュアが民に言っています。その他、申命記や第二サムエル記等にもあります。新約聖書でも一か所あります。第一コリント16:13です。「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい」とあります。ここは第一コリント書の最後のところです。テモテをコリントの教会に遣わす、とのべそのあとパウロはこの言葉をコリントの会衆に述べています。このあとの14節では「いっさいのことを愛をもって行いなさい」と命じています。堅い信仰と愛の業の間に「男らしく、強くありなさい」を置いています。ヘブル語訳新約聖書ではヘブル書11:34にもこの言葉が使用されています。「火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました」。「弱い者なのに強くされ」という「強くされ」がこの言葉です。弱い者が主の言葉によって強くされるのです。気落ちし、どうしようもないと思われていた弱い者ユダの民が力づけられ強くなったのです。聖書の言葉を繰り返し言っていると力が湧いてくる、という経験はキリスト者であれば皆が経験している、と思います。そして、5節で「あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。恐れるな 」と言っています。言い換えますと“あなたの出エジプト、苦難からの救いの時を思い起こしなさい。そのとき私が約束したように、私の霊が常にあなたと共に居るようにしている。恐れるな”となります。そして9節でこの宮のこれから後の栄光は第一神殿をまさるものになり、平和を与える、と言われています。神殿の規模を言っているのではありません。その栄光です。主なる神の栄光を讃える声です。そして神様との正しい関係、神の平和、「シャローム」の時となる、というのです。

　10-19節は第三のメッセージです。12-14節は解りにくい譬えです。12節の意味は次のような意味と推察されます。レビ記6:27に、全焼のいけにえでささげられた肉に触れるものは聖なるものとして、通常使用する物とは別にしなければならない、とされているが、聖なる肉が触った着物の裾がさわったものは聖なるものとなるか、という質問に「否」と言っています。聖なるものに触れたものにさらにふれても聖なる者になるか、と言う質問に「否」と答えているのです。レビ記の意味は聖なる肉に触れたものは特別なものとしなさい、と言っているからと言ってそれにさらに触れば聖なるものとなるなどという都合のよいことはない、と言っています。13節では逆にけがれについて死体に触れて汚れた人が更に触れたものは汚れるか、という質問に「イエス」と言っています。聖なるものに触ったものに触っても聖なるものにならないが、汚れたものに触ったものに触ったら汚れる、と言っています。従って、ユダの民は神殿に捧げられた生贄に触れたので聖なる者とされたと言っているがそんなことで聖なる者とされないし、逆に、信仰的に死んだような者達とともにしているユダの民は汚れのなかにある、ということです。これは神殿祭司の祈りによって拭い去られなければならない、というのです。

　15節に「後のことをよく考えよ」とあります。さきほどの「現状をよく考えよ」と類似の表現です。「現状をよく考えよ」は直訳では「あなた方の心をあなたがたの道の上に据えよ」ですが「後のことを良く考えよ」は「あなた方の心を今日とその上からに据えよ」です。新共同訳では「今日この日から以後、よく心に留めよ」とあります。「現状をよく考えよ」ではどうして今神様の祝福が受けられないのかよく考えろ、と言うのに対し、「後のことを良く考えよ」はかつては神様の祝福を受けられなかったが神殿再建がなった今はこれからの神様の祝福を考えなさい、という訳です。15-16節でかつては神様の祝福がわずかでしかなかった、ということが述べられ、18-19節で祝福に変えられることが示されています。「後の事を良く考えよ」が18節でさらに二度繰り返されています。19節では“種も底を尽き、だが作物はまだ実らない。しかし、これからは祝福がある”との希望を語っています。

　最後が20節以降の第四のメッセージです。ここはゼルバベルの選び、と称されている部分であり議論の多い箇所です。「主の御告げ」や「万軍の主の御告げ」が3回もでてきます。これは第二神殿の完成の時のことを越えて終末の時のことを述べているようです。前半は終末の日に異邦の民の国が滅ぼされイスラエルの支配が回復されるということを言っています。異邦の民の国は「彼ら仲間同士の剣によって倒れる」と言われています。ゼカリヤ書1:12-13にも最後の日の国々の民のあらそいが出てきますがそこでも「彼らは互いに手で掴み合い、互いに殴りかかる」と言われています。お互いに消耗戦をして、両方滅びる、と言われています。問題は最後の23節です。主なる神がゼルバベルを選び取り、印形のように大切な者とする、と言われています。「選び取り」という言葉は「la:qaha」という言葉ですが通常は「取る」という意味で使われます。23節の最後の「選んだ」は「ba:har」という「選ぶ」という意味の動詞です。この二つで「選び取る」と言う意味と考えることもできます。ヘブル書11:25に主イエスの喩えでモーセが「はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました」という表現が出てきますがその「選び取りました」がヘブル語訳聖書で選ぶという意味の「ba:har」です。モーセの強い意志が感じられます。ハガイ書の2:23に即して言えば神様は強い意志を持ってゼルバベルを選び取った、と言うのです。

ゼカリヤ書の3-4章には大祭司ヨシュアとゼルバベルが登場します。そして4:14で「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油注がれた者だ」と言われています。ゼカリア書はハガイ書と同時代の文書ですし、その黙示文学的表現からして油注がれた者とは救い主メシアを指していると考えられます。キリスト教の歴史の中で、この2人は主イエス・キリストの祭司としての側面と王としての側面を指し示している、と解釈されるようになっていきました。そしてハガイ書にもどりますと、2:23の「選び取る」は神様がゼルバベルを王としての救い主イエス・キリストを預言したのだという解釈になります。私はこのようにメシアといえばすぐ主イエスの予型・預言と繋げてしまう解釈の仕方はあまり賛同できません。またここでの「油注がれた者」というのは「itsha:r」という文字通りでは「油の子ら」という表現であり所謂救い主のメシアではありません。油注がれた者がすべて救い主メシアである訳ではありません。ゼルバベルと主イエスはもっと底流のところで繋がっていると理解すべきです。イスラエルの希望、という地下水を通して繋がっている、ということです。ハガイ書がゼカリア書の少し前に書かれた、という前提で考えます。神殿再興者としてのハガイはその業績により偉大な者として、大祭司ヨシュアとともに長く民の記憶に残ることとなった筈です。ゼカリア書4:6によれば主はゼルバベルに『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』という言葉があった、とされています。即ちゼルバベルは主のこの言葉に従い、人間の力ではなく主の霊によって国を治めたと考えられます。そしてこれにより、その権威はダビデの血を受け継いだ者とされ、「ダビデの裔」として生まれるとされた救い主メシアと同一視されることとなっていったと想像できます。

　苦難の末神殿再建がされたのがBC516年。ユダ王国滅亡がBC587年ですから、その間70年でありエレミヤの預言した期間です。外見は決してすばらしいものではありませんでしたが、真の信仰が奉げられる場所となり、イザヤより伝えられた遠く救い主到来の希望を祈り求めるところとなったはずです。私たちの心の神殿に入り「主よ来たりませ」「マラナ・タ」と叫びましょう。